

<動向>

2019 年度人権教育研究室研究部会主催・公開研究会報告 一日常生活を脅かす人権侵害に抗って一

阿 部 潔

2019 年度に開催した二回の研究部会公開研究会について、以下に概要を報告する。

(1) 第 1 回公開研究会—「ブラック企業」

第 1 回公開研究会は、2019 年 10 月 28 日（月）16 時 50 分～19 時に西宮上ヶ原キャンパス B 号館 303 号教室において、『『ブラック企業』の実態と働く者の人権 2』と題し、講師に土屋トカチ監督を招き、同氏の最新作品『アリ地獄天国』（98 分/2019 年）の上映とトークセッションを実施した。本研究会は、昨年度実施した『『ブラック企業』の実態と働く者の人権 1』の続編として、現代日本において労働者が直面する人権問題の現場に密着したドキュメンタリー映画を観ることを通して、労働の場での人権侵害の実態を知ると同時に、それに異議の声を上げて立ち向かう人たちの姿から、いかにして「働く者たちの人権」を守っていくべきかを考える機会を持つことを目標に据えた。

『アリ地獄天国』では、某有名引越会社で活躍していた若者が企業の不法行為に対して異議の声を上げたことをキッカケとして、常識では到底理解できないような不当な扱いを職場で受けながらも、それに屈することなく労働組合活動を通して自らの権利を勝ち取るまでの長い道りが描かれている。映像が映し出すシュレッダー係を言い渡された彼の日常業務は、終日、監視カメラが設置された一人きりの部屋でひたすら廃棄文書を機械

に入れ続け、ビニール袋いっぱいになったゴミを指定された場所へと運ぶことの繰り返しである。かつて成績優秀な営業マンとして表彰され同社で活躍していた彼にとって、それは屈辱に満ちた日々であったことは想像に難くない。さらに経営陣は、組合を通して会社に訴えを起こしたことに対して、誹謗中傷に満ちた文書を顔写真入りで会社内に張り出した。それは、ほかの社員に対して「会社に歯向かう奴は、こんな目に遭わせるぞ」と警告し、彼を支援しないように威嚇するものであった。

だが彼は、不条理なシュレッダー業務を強いられながらもそれに負けることなく、会社の不当性を訴え続けた。世論に訴えるビラ配りなどの広報活動、会社前での街頭演説、弁護士を立ての法廷闘争。しかし、会社側は頑として自らの非を認めることなく、闘争は長期化の様相を深めていく。カメラは、彼をはじめとする関係者たちの憤り、怒り、失望、そしてなによりも揺るがぬ信念の様子を克明に描き続けていく。そこからは、働く者の人権を守り権利を勝ち取ることが決して容易ではないという、今の日本社会の実像が浮かび上がる。

長期間にわたる団体交渉ならびに裁判闘争を経て、最終的に彼は会社側との和解に至った。けれども、その「勝利」が本作の主たるメッセージではないように思われる。もちろん、裁判闘争を通して不当に剥奪された自らの地位と権利を取り戻

すことが、働く者にとって重要であることは言うまでもない。だが、本作を通してリアルに伝わってくるのは、そこに至るまでの過程で彼を取り巻く関係者たち—家族、同僚、組合メンバー、支援者、そして監督—のあいだに築き上げられていった「ひとびとの連帯」の意義と掛け替えのなさである。巨大な企業や組織を前にしたとき、わたしたち一人ひとりの存在はあまりに小さく、個々の持つ力はさして強くないかもしれない。けれども、一人ひとりが自らに対する誇りと互いへのリスペクトに支えられ、ともに立ち上がる時、そこに人権と正義の実現へと向かう大きな力が生まれる。監督自身の体験と想いに根ざしたカメラの眼差しと映像は、そのことを『アリ地獄天国』という珠玉のドキュメンタリーを観る者たちに熱く訴えているように思われた。

トークセッションでは、土屋監督から本作品製作の経緯と背景について話がなされた後、フロアーとのあいだで議論が交わされた。そこでは、『アリ地獄天国』が映し出すあまりに不当で不条理な会社の対応への驚きと憤りが、そして想像を絶するような窮地に追いやられながらも決して諦めることなく、最後まで闘い続けた主人公の若者への驚嘆と賞賛の声が伝えられた。

(2) 第2回公開研究会—監視社会

第2回公開研究会は、2019年12月9日(月) 17時～18時30分に西宮上ヶ原キャンパスB号館302号教室にて、「監視テクノロジーと日常生活—Screening Surveillanceを観る／考える／語る—」と題して、討論者にDavid Murakami Wood氏(カナダ・クィーンズ大学社会学部准教授)と田島知之氏(FCTメディア・リテラシー研究所)を招き、短編映画 *Screening Surveillance* を鑑賞することを通して、ビッグデータ時代を迎えた現代社会で日常生活の監視・管理がどのように進捗しつつあるのかについて考える場を設けた。

Screening Surveillance は、カナダのクィーンズ大学監視研究センターが取り組むプロジェクト

の一環として製作された短編映画集 (*Blaxites, A Model Employee, Frames* の三作品) である。同センターの主要メンバーである Murakami Wood 氏は映画製作の趣旨を、映画祭に出展できるほどの芸術性を備えつつ、大学や地域コミュニティで教材として使われ、社会運動関連のイベントなどで上映されることで、データ監視の実態の理解ならびにそれへの抵抗を喚起するような映像題材を提供することである、と説明した。

これら三つの短編作品は、来たる社会でのデータ監視／管理のあり方を、ある種SF的なタッチで描き出している。取り上げられる領域とテーマはそれぞれ異なるが(医療・労働・日常)、三作品に共通して見出される問題関心は、近年ビジネス界で盛んに喧伝される「ビッグデータ」とそれを活用した「スマート構想」(例えば、スマートシティやスマートコミュニティなど)の批判的な問い直しである。スマート構想では、企業が提供する商品・サービスを利用しているユーザーから日常生活に関する膨大な情報を掻き出し、本人の知らぬ間にデータが収集・分析・活用されている。その意味で「スマートである」ことは、高度な監視社会の到来にほかならない。この厳然たる事実を、三作品は映像を通して訴えかける。

だが、現在の／来るべき監視社会とは、自由を一方的に抑圧したり制限したりするものではない。むしろ逆に、そこでは高度なスマートテクノロジーを駆使することで、人々はより自由かつ快適に暮らすことを保障されているようにすら見える。Murakami Wood 氏が当日の議論で指摘していたように、いまだきの監視はその下で暮らす人たちに拒否されるのではなく、むしろ「好かれる」ことで成り立っている。だからこそ、生活の隅々にまで行き渡った監視を自覚的に認識し、批判的に問い出すことは容易ではないのだ。

こうした現実を踏まえて *Screening Surveillance* は、一見すると効率的で、快適で、楽しいスマート時代には、人々の自由や自律を脅かすようななどのような危うさが潜んでいるのかを、繊細な映像

を通して描き出していく。そこに映し出される日常は、いま現在の私たちが生きる日々とそれほどかけ離れたものではない。観客の多くはおそらく、少し先の未来の出来事として、それを受けとることであろう。それゆえ *Screening Surveillance* が投げかける問いは、実のところきわめて現実味を帯びているのである。個々の人々や社会全般に関わるあらゆる事柄をデータとして捕捉できれば、たしかに快適で安全な生活を送れるだろう。だが他方で、そのことで自由、プライバシー、人権をめぐりなにかが確実に失われていく。便利で快適な生活のために一度手放したものは、はたして後から取り戻せるのだろうか。*Screening Surveillance* が映し出すリアルな映像を通して、ビッグデータ時代を生きる私たちが避けて通れない重い問いが、作品を観る者たちに静かに届けられた。

上映後のディスカッションでは、田島氏から日本でメディア・リテラシー教育／実践に多大な影響を与えた古典的な文献が、かつてオンタリオ州で使われた「教科書」であったことを振り返りながら、これまでのカナダでの監視研究とメディア・リテラシー研究との接点ならびに現在の関係のあり方について問いが投げかけられた。それを受けて Murakami Wood 氏から、メディア・リテラシー教育の背景にあるマクルーハンのメディア論はたしかにカナダにおける知的レガシー（遺産）であるが、それは今では歴史的遺産として受け止められがちであり、その結果、監視研究とメディア・リテラシー論とのあいだに現在ではそれほどの知的交流は見出されないことが指摘された。メディア研究の領域でともに大きな位置を占める監視研究とメディア・リテラシー論の今後の知的交流と架橋の課題を考えるうえで、大変に意義深い議論の機会が持たれた。

(3) 2つの公開研究会が私たちに問いかけること

以上概要を報告した二つの公開研究会は、どちらも映像作品を題材に「人権」について考える機会を設けた点で共通するものの、そこで取り上げ

られたテーマは大きく異なる。だが、両者に共通する問題関心を読み取ることは十分に可能だろう。

第一に、仕事・職場でのハラスメントや違法行為であれ、スマートフォンなどハイテク機器を介したデータ収集であれ、それらはともに、ごく当たり前の日常生活のただ中で起こる問題にほかならない。『アリ地獄天国』が伝える職場での人権侵害は、主として人＝会社経営陣によってなされるが、それが労働者に対する日々の監視と管理を前提としていることは、ここであらためて指摘するまでもないだろう。運送業者に勤務するドライバーは、日々ドライブレコーダーという監視装置のもとで働くことを強いられているからだ。また、*Screening Surveillance* のひとつの作品 *A Model Employee* では、主人公の女性が腕時計型電子端末を労働時間外でも付けることを強いられる様子が描かれる。その理由は、日常生活のモニタリングから得られたデータ分析で「模範的労働者」と認められれば、賃金アップやボーナスが保障されるからだ。そこでは、彼女が勤務するレストランでの時間・空間と、それ以外の生活の時空間との区別は、もはや存在しない。両者は文字通り地続きとなっている。そのように24時間モニターされる日常は、なんとも窮屈な世界に映るかもしれない。だが、現実にはSNSを介していつでも／どこでも繋がっている現代人は、実際には日常そのものがデータ監視の対象と化した時代を、もうすでに生きているのである。

第二に、「人権」をめぐるさまざまな問題は、実のところ互いに関わり合っている。労働者への不法行為を平然と犯す引越業者の内実に迫る映像は、関係者たちの証言を通して驚くべき事実を観る者に伝える。会社の幹部たちは人事採用や勤務評価に際して、あからさまな民族・地域・職業に関わる差別発言と行為をはばかることなく社内でも繰り返していたのである。また、Murakami Wood 氏は議論の中で、テクノロジー企業による営利目的のデータ監視に戦いを挑むことは、世界規模で

進行する環境破壊への異議申し立てと切り離せない」と指摘した。なぜなら、急速に巨大化したテック企業は、今では二酸化炭素排出の主たる担い手だからである。こうした人権と環境に対する企業の取り組みを直視することで、現実社会で人々が直面する暴力はそれぞれ独立して生じるのではなく、相互に絡み合いながら、日常における人権をさまざまなかたちで侵害・抑圧している実態が浮かび上がってくる。

そして最後に、日々深刻さを増していく日常生活の危機を前にして、一人ひとりが声を上げ、毅然と異議を唱え、思いを同じくする者たちと連帯し、今とは異なる世界（alternative world）を想像／創造することの必要性である。それは決して夢物語ではなく、十分に実現可能な投企＝プロジェクトである。不当な力に抗い、自らの「人権」を勝ち取るべく他者と連帯し、正義を求めて闘い続けることが何よりも重要であることが、二度にわたる研究会を通して再認識された。

二つの映像作品は、グローバル化という嵐のもとで危機にさらされている私たち自身の日常を、どのようにして守り、誰もが生きるに値する生活を勝ち取るためには、なにがなされねばならないのかを問いかけていた。ジャンルも手法も大きく異なる二つの作品に触れた後、そこからどのようなメッセージと実践を引き継ぐのかが、これからの私たちに問われている。